

外国人にとってわかりやすい標識表記を考える

—留学生へのアンケート調査の結果を踏まえて

三枝令子
庵 功雄
岩田一成
今村和宏

1. はじめに

本稿は、標識における文字の使用が、外国人の言語理解の実態に合っているかを検証するものである。具体的には、英語の短縮表記の問題、長音のローマ字表記の問題を扱う。英語の短縮表記とは、写真1のように station と書くべきところを stn. と書くようなものである。長音のローマ字表記とは、写真1の Gora、写真2の Sodai-dori のように、本来長音で書くべきところが長音非表示で書かれているものである。写真2は、ローマ字表記のままローマ字入力すると「ソダイドリ」になり、変換してみると「粗大撮り」と意味不明の表現になってしまう。一方、写



写真1 英語の短縮表記の例 駅名表示（神奈川）



写真2 長音非表示の例 道路標識（東京）

真3のように長音を表示している例もあるが数は少ない。菱山・矢沢（2004）は、全国の主要都市や観光地10地区の調査を行っているが、集めたデータの71%が「長音記号なし」であったと指摘している。なお、写真3にも英語の短縮表記のAve.が使われている。



写真3 長音表示／英語は短縮表記の例 道路標識（広島）

本稿では、この2点について、外国人（留学生）に調査を行い、実際にどれくらいの方が理解しているのか、実態を明らかにしたい。

2. 訪日外国人の実態

近年、来日する外国人が増加している。JNTO（日本政府観光局）の統計による2016年度の訪日外国人数は表1、表2の通りである⁽¹⁾。

これら外国人の多くは、旅行者で日本語ができるわけではないため、日本国内を

移動するには道路標識等の案内表示が欠かせない。そこで、どのような案内板を用意するかが問題になる。このことに関しては、すでにいくつかの指針が出されている。

例えば、観光立国推進閣僚会議（2015年6月）では、外国人観光客誘致のための道路案内標識の英語表記の改善・充実が挙げられている⁽²⁾。また、国土地理院（2016年3月）は、外国人

表1 2016年訪日外国人数（地域別）

地域名	訪日者数(人)	%
アジア	20,428,866	84.98
北アメリカ	1,570,420	6.53
ヨーロッパ	1,421,934	5.91
オセアニア	505,638	2.10
南アメリカ	77,958	0.32
アフリカ	33,762	0.14
その他	1,122	0.00
総数	24,039,700	100.00

表2 2016年訪日外国人数(国・地域別)

順位	国・地域	訪日者数	%	順位	国・地域	訪日者数	%
1	中国	6,373,564	26.89	11	英国	292,458	1.23
2	韓国	5,090,302	21.47	12	カナダ	273,213	1.15
3	台湾	4,167,512	17.58	13	インドネシア	271,014	1.14
4	香港	1,839,193	7.76	14	フランス	253,449	1.07
5	米国	1,242,719	5.24	15	ベトナム	233,763	0.99
6	タイ	901,525	3.80	16	ドイツ	183,288	0.77
7	豪州	445,332	1.88	17	インド	122,939	0.52
8	マレーシア	394,268	1.66	18	イタリア	119,251	0.50
9	シンガポール	361,807	1.53	19	マカオ	99,425	0.42
10	フィリピン	347,861	1.47	20	スペイン	91,849	0.39

にわかりやすい地図を作成するための標準として、地図に記載する地名等の英語表記を決定している⁽³⁾。

こうした行政から出される指針の共通点は、英語表記を使えば、外国人にとってやさしくなるとみなしている点である。しかし、ここには考えるべき問題がある。

まず、外国人にとってわかりやすいということは、実際には何を意味しているのだろうか。外国人にとってわかりやすいか否かは、外国人に聞いてみなければわからない。しかし、現実には、そうした検証は行われていないように見受けられる。

もう一つの問題は、来日する外国人のために英語表記を用意しようとしているのだが、実際は、来日する外国人の中で英語話者は決して多くないという現実が忘れられている点である(表2参照)。

例えば、外国人向けの案内板では、スペースの制約から英語の短縮表記がよく使われている。しかし、これが外国人にどのように受け取られているかという検証も見かけない。行政側は、外国人は、sta.とあれば「駅」だとわかり、st.は「道」であるとわかると考えている節があるが、その根拠は何だろうか。

少なくとも在住外国人は、英語がわからない人のほうが多いので(岩田2010)、標識に英語を使うなら、読んだ人がわからない場合には自分で調べられるような表記を使うべきである。本稿では、道路標識の表記を考えるにあたって、来日中の留学生の意見を聞くことを通して、外国人にとってのわかりやすさを具体的に考えた。

もう1点、本稿で強調したいのは以下の点である。誰にもわかる表記を目指すならば、英語に訳す前に、ローマ字表記を徹底する必要がある。誤解の多いところだが、ローマ字は日本語であって、英語ではない。まず、日本語を、多くの人が読むことができるアルファベットで書く方法（表記法）を確立すべきである⁽⁴⁾。英語、中国語、韓国語等の外国語表記は、ローマ字の日本語表記を整えたのち、余裕があればつけたらいいものである。

国土交通省が2006年に出した「公共交通機関における外国語等による情報提供促進措置ガイドライン」（以下、ガイドラインと略す）には、固有名詞はローマ字で表記するとあるが⁽⁵⁾、このガイドラインは、実際は守られておらず、固有名詞を翻訳する自治体が出ている。

本稿では、まず、標識にローマ字を使う必要性とその場合の表記法について述べ、その後、調査に基づいて、標識への英語使用が設置者の意図に必ずしも沿っていないことを述べる。

3. 標識のローマ字表記の現状

先に挙げたガイドラインの英語表記ルールでは、富山湾はToyama Bayと表記することになっている。Toyama Bayという表記はあってもよいが、まず必要なのは、Toyama Wanというローマ字表記である。新霞が関ビルは、New Kasumigaseki Buildingではなく、Shin Kasumigaseki Biru（ヘボン式の場合）とまず表示する必要がある。

その理由は次のような点にある。まず、日本の地名は誰にでも読める日本語で表記される必要があること、次に、日本人も英語がよくわかるわけではないから、英語訳で道を聞かれたら、日本人にも理解できない場合があること、さらに、各人がそれぞれに英訳すれば、外国人が手にする地図上の名前と標識の不一致が起ることである。高知城もKôchi castle（ヘボン式）よりもKôchi jô (castle)のほうが外国人にとって理解され、英語がわからない日本人にも通じる⁽⁶⁾。

ローマ字を使用する場合、表記をどうするかが問題になる。ローマ字の表記法については、1954年に内閣訓令で、訓令式を使うこと、長音は母音字の上にハをつけて表すことが決められた。しかし、現在外務省は、ガイドラインでヘボン式を使

うこととしている。異なる表記を使うのは現場を混乱させ望ましいことではなく、統一が望ましい。もう一つのより重大な問題は、長音をどのように表記するかということである。日本語では、長音と短音は意味の違いをもたらしており、この区別は重要である。「交番」は kôban であって、「小判」koban ではない。意味の違いがあるものを無視すれば、さまざまところで問題が生じる。



写真4 「交番」は「KOBAN」でいいのか？

4. 標識における表記に関するアンケート調査とその結果

以上の問題意識を踏まえ、現在日本で行われている英語、ローマ字の表記が外国人にとって、本当にわかりやすいのかを調べるための調査を行った。本節ではその概要と結果を報告する。

4.1 調査の概要

1) 調査の目的

調査では、2つの内容を調べた。

調査1は英語略記について外国人の理解度を知るためのものであり、調査2は長音のローマ字表記について外国人の意見を聞くためのものである。

2) 調査の内容

調査は2016年1月下旬に、都内のA大学において、外国人留学生100名を対象に行った。

調査はアンケート方式で行った。日本語の授業の残り時間の最後の部分で、担当の教師がアンケート用紙を配布し、その場で協力者に記入してもらい回収した。実施方法について細かく説明したクラスと、協力者に調査文を読んでもらい口頭では特に説明せずに実施したクラスとがある。

3) 調査協力者の属性

調査協力者の属性は次の通りである。

①国籍

国籍の内訳は次の通りである。

中国31名、韓国20名、台湾・イギリス各6名、香港5名、ドイツ4名、アメリカ・オーストラリア各3名、タイ・ポーランド各2名、アイルランド・オーストリア・オランダ・カナダ・スウェーデン・セルビア・フランス・ロシア・ブラジル・カンボジア・パキスタン・モンゴル・ブルネイ・ミャンマー・マレーシア各1名、無記入3名、合計100名

②母語

母語の内訳は次の通りである。

中国語38名、韓国語20名、英語14名、ドイツ語5名、広東語4名、タイ語・ポーランド語各2名、その他12言語各1名、2言語記入者2名、無記入3名

表3 滞日期間の内訳

期間	人数
3か月未満	0
3か月以上半年未満	36
半年以上1年未満	18
1年以上2年未満	12
2年以上	30
無記入	4
計	100

③大学での身分

大学での身分の内訳は次の通りである。

交流学生40名、学部生28名、大学院生11名、大学院研究生8名、日本語・日本文化研修留学生（日研生）7名、その他2名、無記入4名

④滞日期間

滞日期間の内訳は表3の通りである。

4.2 調査1：英語の短縮表記に関する理解度

調査1では、英語の短縮表記について、調査協力者本人および国にいる家族の理解度を尋ねた。協力者本人は、一定期間の日本滞在によって現行の表記に慣れている可能性があるため、その影響のない、国にいる家族の理解度についても尋ねた。本人については、わかるとした場合、その内容を書いてもらった。調査項目は、sta., stn., st., br., J.H.Sch., Ginza E. の6項目である。調査結果は表4の通りであった。

表4 英語の短縮表記の理解度

項目	本人				家族			
	わかる	わからない	無記入	合計	わかる	わからない	無記入	合計
sta.	45	55	0	100	26	67	7	100
stn.	15	85	0	100	7	88	5	100
st.	41	55	4	100	41	55	4	100
br.	16	84	0	100	9	88	3	100
J.H.Sch.	33	66	1	100	8	89	3	100
Ginza E.	26	74	0	100	6	90	4	100
合計	176	419	5	600	97	477	26	600
	29%	70%	1%	100%	14%	82%	4%	100

表4の合計欄は、全ての項目について「わかる」または「わからない」と回答した者を合計した値と、その割合である。

この結果から、次のようなことがわかる。

まず、協力者本人について見ると、短縮表記について「わからない」と回答した者が全体の70%を占めており、6種類の表記の中では、「わかる」と回答した者が半数を超える項目はなく、stn.>br.>Ginza E.の順で「わからない」と回答する者が多い。「わかる」の割合が最も高かった表記は、sta. (45%)であった。

一方、家族に関しては、「わからない」と回答した者が80%以上で、「わかる」の割合が最も多かったのはst. (41%)であった。

表5は、「わかる」とした場合に具体的に書いた内容である。なお、「わからない」と回答しながら具体的な内容を記入した回答者がいるため、表4の「わかる」の回答者数と表5の内容記載数とは一致しない。

表5の各項目に記載された内容で一番多かった回答は、標識設置者が意図したものであった。特に、st.とsta.の正解数が多い。ただし、st.にはstationと回答

表5 「わかる」場合の内容

sta.	stn.	st.	br.	J. H. Sch.	Ginza E.						
station/駅	48	station/駅	17	street/街/道/ みち/道路/街道	51	bridge/橋	19	Junior High school/中学校	31	East/東	11
stadium	1	something	1	station/駅	6	brother	2	学校/学校の名前	4	Eki/駅	11
state	1	stone...石?	1	street, nation	1	Branch/ブ ランチ	2	高校	3	不明	6
美国大学 入学試験	1	street, nation	1	saint	1	birthday	1	John's Hopkins School	2	銀座東, 東銀座	4
不明	1	stxxxn	1	Sankt	1	ブラジル	1	Japanese High School	1	Express	2
				stop?	1			J. H. Scholarship	1	Exist ⁽⁷⁾	1
				ストライカー?	1			人の名前	1	出口	1
				such that	1			女子ハイスクール??	1	ETC?	1
				曖昧な意味	1					銀座Eビル?	1
				人の名前の前 によく使う	1					Eさん	1
										銀座東口?	1
										銀座E棟	1
										Estate	1

した者も6名いた。Ginza E.は難しかったようで、記載内容が多岐にわたっている。

次の表6は、略記の英語話者本人の理解度と全体の理解度を比べたものである。以下の表に示されているように英語話者は、br.の項目以外では回答者全体より理解度が高いが、それでも平均が50%を超えてはいない。

表6 英語母語話者本人の理解度

	sta.	stn.	st.	br.	J.H.Sch.	Ginza E.	平均
英語話者14名中の人数	8	6	10	1	8	4	
理解度 (%)	57%	43%	71%	7%	57%	29%	44%
対象全体100名中の人数	45	15	41	16	33	26	
理解度 (%)	45%	15%	41%	16%	33%	26%	29%

次の表7は滞在年数によって略記の理解度が異なるかを見たものであるが、半年未満の者と、2年以上滞在している者を比べても、滞在年数が長ければ理解度が高くなるという傾向は見られない。

表7 滞在年数による理解度の違い：わかるとした人数

滞在年数	全体の人数	sta.	stn.	st.	br	J.H.Sch	GinzaE
半年未満	36	20	6	26	8	12	16
2年以上	30	10	2	18	5	9	3

4.3 調査2：長音のローマ字表記に関する調査

調査2では、長音のローマ字として適当と思うものを5種類の表記から選んでもらった。その際、現行の表記を選ぶ可能性があるので、選ぶ数を2つにすることにした。すなわち、1番わかりやすいものと2番目にわかりやすいものにそれぞれ印をつけてもらった。選択肢に適当なものがない場合は「その他」に記入してもらった。調査項目は、「中、旧、交、城、空港」の音読みの5項目である。

調査結果は表8-1～8-5の通りである。ここで、各表の一番左の欄の1,2は、1番わかりやすいもの、2番目にわかりやすいものを意味している。しかし、この指示は回答者にはわかりにくかったようで、2番目を記入していないものも多かった。以下では、主に合計をもとに記述する。

表8-1 「中」の長音表記

中	a. Chuu	b. Chu:	c. Chû	d. Chū	e. Chu	f. その他
1	43	3	4	50	7	0
2	22	10	3	23	14	0
計	65	13	7	73	21	0

「中」の表記で多く選ばれたのはdのChūで、次はaのChuuだった。山型記号とコロンを選んだものは少なく、現行の長音を表記しない表記を選んだ者も少ない。

表8-2 「旧」の長音表記

旧	a. Kyuu	b. Kyu:	c. Kyû	d. Kyū	e. Kyu	f. その他
1	42	3	3	52	7	0
2	21	11	5	21	15	0
計	63	14	8	73	22	0

「旧」の表記も「中」と同様、多く選ばれたのはdのKyūで、次にuの母音を重ねるaのKyuuだった。山型記号とコロンを選んだものは少なく、現行の長音を表記しない表記を選んだ者も少ない。

表8-3 「交」の長音表記

交	a. Koo	b. Ko:	c. Kō	d. Kō	e. Ko	f. その他
1	25	3	5	54	8	12
2	9	10	7	20	18	9
計	34	13	12	74	26	21

「交」の表記は、cのKōをわかりやすいとする者がもっとも多く74名、次はずっと少なくaのKooの34名だった。現行の表記、eのKoをわかりやすいとする者は26名と多くない。f.その他に記載した者が21名あったが、全員Kouだった。

表8-4 「城」の長音表記

城	a. Joo	b. Jo:	c. Jô	d. Jō	e. Jo	f. その他
1	21	3	7	49	10	16
2	7	10	0	22	15	8
計	28	13	7	71	25	24

「城」の表記は、dのJōをわかりやすいとする者がもっとも多く71名、次はずっと少なくaのJooを選んだ28名だった。現行のeのJoは25名と多くない。その他に記載されたのは、Jou 16名、Jyo 4名、Jyō 2名、Jyou 1名、Zyou 1名だった。

表8-5 「空港」の長音表記

空港	a. Kuukoo	b. Kuko:	c. Kūkō	d. Kūkō	e. Kuko	f. その他
1	25	3	1	55	10	12
2	12	7	6	20	16	9
計	37	10	7	75	26	21

「空港」の表記は、dのKūkōをわかりやすいとする者がもっとも多く75名、次は、aのKuukooと母音を重ねる表記で37名、現行の長音を表記しないeのKukoをわかりやすいとする者は26名だった。その他に記載されたのは、Kuukouが16名、それ以外はairport, Kūkō, Kukou, Kuokō, Kuukō各1名だった。

4.4 調査結果のまとめ

以上の調査結果をまとめると次のようになる。

第一に、英語の短縮表記の理解度は、英語母語話者においてすら決して高くはないということが挙げられる。このことは、現行の短縮表記が、日本国内の「ローカルルール」であることを示唆している。庵(2017:24-30)でも指摘したように、英語での表記は「日本語はわからないが、英語ならわかる」人が理解できるものでなければならない。その意味で、英語母語話者すら理解できないような短縮表記を

用いることは、観光客向けの施策としても重大な問題を含んでいると言える。

第二に、長音のローマ字表記について、今回取り上げた5つの語全体を通して、長音表記としてわかりやすいとされたのは語の上に線を引くという、正書法として認められている方式であった。現行の長音を表記しない方法は2割強の者にしか支持されなかった。このことは、正書法との関連からも重要な意味を持っていると言える。なお、オの長音については、ouをわかりやすいとする者が一定数存在した。これには、ひらがな表記の影響が考えられるので、この問題について考える際に考慮すべき点である。

5. これまでに出了されたガイドライン

本節では、標識におけるローマ字表記に関してこれまでに出了された主なガイドラインと、それに関する問題点を概観する。

道路標示の基本方針は2005年、2006年、2014年に出了された国土交通省のガイドラインに沿っている。どれもインターネットでタイトルを検索すればPDFファイルで読めるようになっている。

国土交通省（2005）『観光活性化標識ガイドライン』⁽⁸⁾

国土交通省総合政策局観光地域振興（2006）『公共交通機関における外国語等による情報提供促進措置ガイドライン～外国人がひとり歩きできる公共交通の実現に向けて～』⁽⁵⁾

国土交通省観光庁（2014）『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』⁽⁹⁾

このように次々と指針が出了されたのは、2000年初頭のビジットジャパンキャンペーンにより、標識に関する議論が高まったためと見られる。2005年のガイドラインの時点で、「日本語のローマ字表記についてはヘボン式を用いる（p.10）」と明示しており、これが本稿で扱う、長音非表示の問題に関わっている。ヘボン式では長音を表示しないが、パスポートがヘボン式を採用しているため、ヘボン式が国際的なものであるというイメージがあるのかと思われる。ただし、長音非表示が日本

語の実態に合っていないのはすでに指摘した通りである。2014年のガイドラインではヘボン式を引き続き推奨しつつ、長音の表示については注意が出されている。

長音は母音字の上に「-」（長音符標）をつけて表すことができる。

長音が大文字の場合は母音字を並べることができる。

(注) 長音符号は日本独自のもので、国際化されていないため、外国人に理解されない可能性もある。長音符号の使用は事業者や自治体等で対応が異なる、もしくは使用しない場合があるため表示にあたっては確認が必要。(p.16)

結局長音表示を勧めているのか止めさせたいのかよくわからないため、現在の状況につながっている。

英語の短縮表記に関する記述も2005年ガイドラインにある。「略語が慣用化されている場合は略語を用いることができる(p.10)」とあり、「sta. (station)」の例とともに短縮表示を推進している。

ここで問題なのは、「sta.」以外に使ってもいい表示例が示されていないことである。何をもって慣用化されていると考えるのか基準が示されていない。2014年ガイドラインでも短縮表記使用の方針は踏襲されている。

スペース・視認性の観点等から略語を用いることが適当と考えられる場合は、略語を用いることができる。(例: Station ⇒ Sta., Building ⇒ Bldg.) (p.14)

スペースの問題としつつ、Buildingの例が加わっているが、結局何を短縮化しているのかの基準はあいまいなまま現在に至っている。

6. おわりに——本稿の提言——

以上を踏まえて、ローマ字表記に関する本稿の提言をまとめると次のようになる。まず、長音については、次のことを原則とする。

- (1) a. 長音と短音はきちんと区別し、長音は対応する単音と異なる表記を行う。
- b. 長音表記にhは用いない。(E.g. 太田を Ohta としない)

c. 長音はōのように母音字の上に横棒を引いて示すか, oo, aaのように母音を重ねて表記する⁽¹⁰⁾.

次に, 長音と二重母音の区別である. 二重母音に関しては, ひらがなの場合しか規定がないが, 外来語(カタカナ語)については, 同様に長音を使えばよいと考える(E.g. コーヒーは kōhi または koohii とする).

一方, エイ, オウをローマ字でどのように表記するかについてだが, これには, 次の3つの方式が考えられる.

1) どちらも長音にする(表音主義).

E.g. びょういん: byōin /byooin, くうこう: kūkō /kuukoo,
えいが: ēga /eega, へいや: hēya/heeya

2) オウは長音に, エイは現行のひらがな表記を用いる.

E.g. おうさま: ōsama, えいが: eiga, へいや: heiya

3) どちらも現行の表記のままとする.

E.g. びょういん: byouin, くうこう: kuukou

これについては, 本稿では, 本田ほか(2017)同様, ローマ字表記は外国人が読むためのものであり, 日本語母語話者にとっての表記(注4で挙げた正書法の問題)とは別の基準で考える. その上で, 1)の表音主義をとり, 長音は, 母音字の上に横棒をつけたものを用いるか, 母音字を重ねることを提案する.

最後に, 次のような場合に, 英訳を付けるものと付けないものの線引きをどうするかということがある(E.g. 修学院離宮, 駒ヶ岳). これについては, 地図などではスペースの関係もあるので, 「一山」「一寺」「一川」などで終わるもの以外は英訳をする必要はないと考える.

本稿で行った調査は小規模なものではあるが, 現行の短縮表記などが本来の役割を十分に果たせていないことが示唆されることとなった. 本稿で提起した問題は, 観光目的の外国人だけでなく, 定住外国人にとっても重要な点を含んでいる(本田ほか(2017)). 今後は, さらにデータを増やし, より説得力を持った議論を展開していきたい.

補遺

本稿は, ローマ字表記を日本語が(十分に)理解できない外国人の立場から考え

たもの、すなわち、外国人という「言語ユーザー」の立場から、日本国内の標識のローマ字表記のわかりやすさを考えたものである (cf. 本田ほか (2017), 庵 (2016)).

これに対し、ローマ字表記を日本語母語話者にとっての問題として考える立場もあり得る。これは、正書法や音韻論の観点からローマ字表記を考えるものである。この立場から考えたときの課題は、音韻論的に合理的な表記を考究することであるが、それに加えて、国語教育における受け入れやすさという点も無視できない側面である⁽¹¹⁾。この立場からの研究は、日本語母語話者という「言語ユーザー」にとってのローマ字表記⁽¹²⁾とはどのようなものであるべきかという観点からも評価されるべきものである。

引用文献

- 庵功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』入門——日本語学の父 三上章——』くろしお出版
- 庵功雄 (2016) 『やさしい日本語——多文化共生社会へ』岩波新書
- 岩田一成 (2010) 「言語サービスにおける英語志向——「生活のための日本語：全国調査」結果と広島事例から——」『社会言語科学』13-1, pp.81-94
- 岩田一成 (2015) 「公共サインのやさしい表示を考える」『ことばと文字』4, pp.14-21
くろしお出版
- 菱山剛秀・矢沢勇 (2004) 「2004年ローマ字表記地図および地図記号に関する実態調査作業」『国土交通省国土地理院調査研究年報』pp.53-54
- 本田弘之・岩田一成・倉林秀男 (2017) 『町の公共サインを点検する』大修館書店
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 三上章 (1963) 『日本語の論理』くろしお出版

注及び引用した URL

- (1) 日本政府観光局 (2017) 「統計データ (訪日外国人・出国日本人)」
http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/index.html
- (2) 観光立国推進閣僚会議 (2015) 「観光立国実現に向けたアクション・プログラム 2015」
<https://www.mlit.go.jp/common/001092004.pdf>
- (3) 国土地理院 (2016) 「アクションプラン 2016」
<http://www.gsi.go.jp/common/000138771.pdf>
- (4) これは、日本語における正書法 (orthography) の問題である。近代の national language の多くでは正書法は明確に規定されている。正書法が不明確であることは、そうした他言語と比較した際の日本語の大きな欠点であると同時に、日本語

が国際語を目指す上でも深刻な問題となりうる。

- (5) 国土交通省総合政策局観光地域振興課 (2006) 「公共交通機関における外国語等による情報提供促進措置ガイドライン」
<https://www.mlit.go.jp/common/000059338.pdf>
- (6) さらに、実際は ` 表記が用いられないことが多いため、高知城は Kochi Castle と表記されることが多い。そうすると、外国人は [kotʃi kæsɫ] (「コチキャスル」) と発音することになり、日本語母語話者には「コーチ (高知)」が「コチ」になり、「こっち」と干渉するといったことも起こりかねない。
- (7) 原文のママ
- (8) 国土交通省 (2005) 『観光活性化標識ガイドライン』
<https://www.mlit.go.jp/common/000059348.pdf>
- (9) 国土交通省観光庁 (2014) 『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』
<https://www.mlit.go.jp/common/001029742.pdf>
- (10) 4節で見たように、母音字の上に横棒をつける表記 (ü, ö など) は、今回の留学生対象のアンケートで、最もわかりやすいとされたものである。
- (11) 三上章の「主語廃止論」は、現在、日本語学の世界で基本的に受け入れられており、少なくとも、学校文法と同様の「「は」も「が」も主語である」という言明は、現代日本語に関するほぼ全ての文法研究において否定されている (三上の主語廃止論について詳しくは、三上 (1960, 1963), 庵 (2003) 参照)。それにもかかわらず、学校文法にその知見が移入される気配はない。その背景には、「「は」も「が」も主語である」という言明を崩すことへの教育現場の強い抵抗があると考えられる。そうしたことを考えた場合、あり得べき (すなわち、日本語母語話者が主体的に実践すると考えられる) ローマ字表記は、単に理論的に整合的であるだけでなく、現在の国語教育における表記法とも整合的である必要があると考えられるのである (cf. 毎日新聞電子版 2017)。毎日新聞電子版 (2017) 「ローマ字表記で混乱 英語教科化、教員ら「一本化を」」
(2017.3.21)<https://mainichi.jp/articles/20170321/k00/00e/040/204000c>
- (12) 現代日本語の言語生活にローマ字は不要であると考えられるかもしれないが、実は、現在の言語生活に不可欠であるワープロソフトへの日本語入力においてはローマ字入力が使われるのが一般的であり、これは別の見方をすれば、現在の日本語使用者 (日本語母語話者、非母語話者とも) は、手書きで日本語を書いていたときよりもはるかに高い頻度で、「ローマ字書きの日本語」によって日本語表現を行っているとも言えるのである。

以上の全ての URL に関する最終閲覧日は 2017 年 9 月 13 日である。